

「国策紙芝居」―但馬出石調査報告

大串 潤児

(非文字資料研究センター 客員研究員)

原田 広

(非文字資料研究センター 研究協力者)

1. 発端

“はじまり”は『神戸新聞』Web版、2017年8月30日配信の記事でした。共同研究「戦時下日本の大衆メディア研究」班（通称「紙芝居班」）が、戦時下紙芝居（教育紙芝居・国策紙芝居など）の書誌・全国所蔵機関目録作成を目標に掲げてから、筆者（大串）はインターネットで意識的に戦時下の紙芝居関連の記事を検索してきました。そう数多くの記事がヒットするわけではないですが、とくに戦後70年にかかわって、各地域で行われた博物館企画展など戦争の時代を回顧し、考えようとするさまざまな営みのなかに紙芝居の記事をいくつか見付けることができました。前記『神戸新聞』記事もそうしたうちの一つでした。

『神戸新聞』記事には写真も掲げられていましたが、それはどうやら非文字資料研究センターコレクションにはない紙芝居のようでした。すぐさま所蔵者の川見章夫さんに手紙を書き、いくどかのやり取りをへて出石町調査が決まったのは2017年秋も深まりゆく頃だったと思います。家事多忙の年末をひかえて、私どもの研究の趣旨をご理解くださり、訪問調査を快諾された川見章夫さんには感謝してもきれません。『神戸新聞』記事でも54点（後に56点〔うち戦後2点〕とわかる）の紙芝居があることが示されていましたが、川見さんから事前に送ってもらった「目録」によれば、川見さん所蔵の紙芝居群には非文字資料研究センターが所蔵していないもののみならず、実物そのものが未見のもの、またこれまで知られていなかったものなど、多くの新発見の紙芝居がふくまれていて、共同研究班のメンバーの調査への期待はいやがおうにも高まったのです。調査は2017年12月16～18日、班のメンバー6人によって行われました。

2. 但馬豊岡・出石へ

京都駅はいつものようにごった返していました。外国人観光客が目立つのも昨今の特徴かもしれません。山陰本線のホームで特急（「きのさき」「こうのとりのりかえ」、一路、但馬の国、兵庫県豊岡市に向かいました。薄曇りでしたが、雪はふっていません。亀岡・綾部・福知山と丹波路をぬけて、正午には豊岡駅に着きました。いまでは多く駅ビルなどによって消えてしまっているいわゆる「駅前食堂」で昼食を済ませた後、レンタカーで出石町へ向かいました。

出石町は豊岡駅から車で30分ほどの山あいの小さな城下町です。出石城跡や、舟運で栄えたことが偲ばれる船付き場、城下町風情が漂う街並みを見ながら、同町「福住地区コミュニティセンター」に到着しました。川見さんとはここで待ち合わせ、町場のご自宅を訪問しました。研究班調査参加者の自己紹介の後、川見さんからは紙芝居の旧蔵者・川見忠雄さん（章夫さんご尊父）のこと、章夫さんご自身の紙芝居史料へのお考えなど、有意義かつ興味深いお話を伺いました。川見さんご自身も、この調査をきっかけにして「父の歴史」「父の教育実践」や家族の歴史を考えてみたいとのことでした⁽¹⁾。その仕事がまとまることを期待しつつも、調査で教えられた川



写真1 川見氏宅での聞きとり



見忠雄さんのことについて、若干の補足をしつつ簡単な略歴を記録しておきます。

3. ひとりの教師と紙芝居

川見忠雄さんは1911（明治44）年に生まれます。もとは出石藩校であった弘道小学校を卒業後、豊岡中学校に進学、続いて御影師範学校に進んで教師の道を歩み始めます。1930（昭和5）年から出石町近郊・寺坂尋常小学校訓導となり、1937（昭和12）年から1942（昭和17）年は三宅尋常・高等小学校（豊岡市神美小学校）、さらに1942年からは弘道国民学校に勤めています。戦後も一貫して教師の道を歩まれ、1961年に亡くなっています（享年は51歳）⁽²⁾。まじめに教育実践を行う篤実な教師だったそうです。郷土の文化財にも関心を持っていたようで、寺坂小学校訓導時代に「陶磁器並出石焼について」（『兵庫教育』第549号、1932.7.15）という論考を発表しています⁽³⁾。ちなみに但馬地域で「郷土教育」の成果がまとまるのは戦時期になります。城崎郡豊岡小学校『豊岡郷土読本』（1938年、120頁）、養父郡宿南小学校『宿南村郷土読本』（1938年、謄写版83頁）がその代表ですが、朝来郡中川小学校の郷土教育実践が著名であり、特別カリキュラム編成も行われています⁽⁴⁾。しかし、但馬の郷土教育は次第に形骸化していく面もあったようです。国民学校への再編成をへて、新たな郷土教育を実践しようとしていた城崎郡豊岡第一国民学校の児島義一は、従来の郷土教育を「ただ単に児童の生活に縁遠いと思われる位置・地勢・気候・産業・交通等々の地理的項目にしたがい、やつてもやらなくてもよいようなことを通り一ぺんにやつた傾向がある。はなはだしいのは最も大切な臨地指導による読図の初歩指導をなさず、教室内で『〇〇村郷土地理』『〇〇村郷土読本』なるものを読む程度に墮した。（中略）かかる読物に限り皇民錬成という日本教育を忘却して、郷土というカラに立てこもり、郷土らしいさんの因循こ息教育を唱えている」と述べています⁽⁵⁾。

こうしたなかで川見忠雄さんは、積極的に（あるいは実験的に）紙芝居を教材として授業に使っていたのです。忠雄さんの蔵書には雑誌『教育紙芝居』・『紙芝居』もあり、その新刊目録などから自分の好きな紙芝居を注文していました。学校単位で紙芝居実践のグループが作られる場合、『教育紙芝居』・『紙芝居』などには記録されることがありますが、教育の場面においてはやはり集団での活用というよりは、教員個人の努力や嗜好によるとこ

ろが大きかったようです。兵庫県では大都市・神戸や淡路島洲本などに日本教育紙芝居協会支部があったことが知られていますが、但馬地方では生野、朝来支部の事例が記録されています。生野の金山輝雄は、朝来地域の様子について、朝来支部の設立は「その緒についたばかり」でメンバーの応召（和田山小学校）や退職により「計画のまゝで、支部として何等の組織的な活動の出来てゐない」と指摘しています⁽⁶⁾。ここで言われている退職者は中川小学校の教師であり、残念ながら紙芝居教育実践と郷土教育実践はわずかな時間で“すれ違っていった”こととなります。また、1939（昭和14）年には「前から会員の多い但馬方面からも火の手が上つて、兵庫県の紙芝居運動はいよゝ盛んに」（平林博「私の採点簿」を携へて）『教育紙芝居』第2巻第2号、1939.2.1）と記録されています。

このように、実際の学校現場における紙芝居教育実践には教員個人の役割が大きい場合があったわけですが、ここでは紙芝居教育実践と郷土教育実践という論点があることを確認しておきたいと思います。川見忠雄さんの事例も、その紙芝居教育実践は学校ぐるみの教育というよりは、基本的には個人的な努力に負うところが大きかったのではないのでしょうか。郷土教育の実践など地域の教育全体のなかで今後とも丁寧に考えていきたい論点です。なお川見忠雄さんは、カメラを趣味とし、戦後は紙芝居にかえてスライドを活用していたそうです。

4. 雪の城崎

城崎温泉では雪になっていました。ひなびた宿の二階の窓からは大谿川の流れが見え、目前には1963年に開通した城崎温泉ロープウェイの山麓駅がありました。ロープウェイで大師山の山頂に登るとカニ供養のための「カニ塚」もあるそうです。私たちも“地のもの”（カニの美味）をとおして地域の文化にふれる醍醐味を味わった一夜でした。城崎温泉の歴史については、神戸新聞但馬総局編『城崎物語』改訂版（神戸新聞総合出版センター、2006年）がわかりやすく書いてくれています。これによると、城崎温泉の「女中」は戦後しばらくまで附近農村からの出稼ぎ奉公（「花嫁修業」）が多かったそうです。仲居さんの話では、いわゆる「丹後ちりめん」の女工さんもこの地域には多かったそうです⁽⁷⁾。また、古典的な名著・川島武宜ほか『温泉権の研究』正・続（勁草書房、1964・1980年）が1920年代後半期からの内湯・外湯をめぐる紛争を描いています。もちろん、私

たちは一夜の旅人、城崎文化のすがたは翌朝の大雪のように茫として見えませんでした。

5. 紙芝居と但馬のひとびと

紙芝居撮影のかたわら、多くの地域の方々にお世話になりました。初日には前掲『神戸新聞』記事にも紹介された「出石いのちと平和の会」のみなさんと話し合いの機会を持つことができました。「出石いのちと平和の会」は、川見章夫さん所蔵の紙芝居を2017年夏に上演した方々です（この活動が記事となった）。みなさんの戦争体験を語ってもらった後、すでに70点もの紙芝居を作成されている「ふるさと紙芝居の会」による『斎藤隆夫の生涯』を上演していただきました。普段は小・中学校や公民館で実演しているそうです。また、満洲移民をテーマにした作品もあるそうです。大判の紙に描かれた『斎藤隆夫の生涯』は、たいへんわかりやすいものでした。何よりもこの地域の人びとに現在までも（いや、今だからこそ）斎藤隆夫が敬慕され、かつ語り継がれていることには驚きました。川見章夫さんに案内していただいた「斎藤隆夫記念館 静思堂」は雪のなかでしたが、民衆と最も近い場所にいた政党政治家のひとり・斎藤隆夫の「重さ」を感じました⁹⁾。「大衆」を組織しようとした斎藤隆夫の政治姿勢、その基盤としての青年党運動、そして青年党運動の文化史的再検討、つまり政治運動のなかの紙芝居活用といった問題も視野に入ってくるのでしょうか。

これまでの「地域における紙芝居運動」研究・調査においては、綴り方教育実践・運動と紙芝居実践との関連が論点となってきました（福岡県朝倉市・平島三吾、北海道における紙芝居運動の事例など）。但馬地域にも、生活綴り方運動指導者のひとり・東井義雄がいます（豊岡市但東町出身）。彼の「教育実践と紙芝居」という問

題も今回の調査で意識していたテーマの一つでした。こちらも川見さんの案内で豊岡市役所但東支所にある「東井義雄記念館」を訪れました。館長さんは多忙のなか対応していただきました。東井自身は、生家の寺院で紙芝居を上演したことはあったようですが、残念ながら今回の調査では彼の教育実践活動と紙芝居、そして地域の教育社会との関係はつめて考えることができませんでした。東井義雄『学童の臣民感覚』（日本放送出版協会、1944年）の再検討・再読解などの課題ともども新たな研究が始まっています⁹⁾。

出石の街中には明治期に建てられた劇場「永楽館」が再建・保存活用されています。1930年代には映画館もかね、出石のモダニズム文化の拠点ともなった場所でした。1943年6月19～20日、出石町青年黎明会は、銃後奉公会・在郷軍人会・婦人会などと共催で「米英撃滅素人演芸大会」を永楽館で開催しています。入場料は軍用機献納、町の忠霊塔建設資金に充てることとしました。演目には軍国歌謡曲、流行歌・「伊那の勘太郎」などが挙げられていますが、紙芝居が上演されたかどうかは『神戸新聞』1944.6.19付の報道からだけではわかりません¹⁰⁾。

東京帝国大学総長となった加藤弘之を生むなど、城下町・出石の文化の厚みは街のあちこちにかがうことができました。紙芝居実践はひとりの教師の努力によって行われ、その記録を大事に思う人びとの手によって今に伝えられました。紙芝居教育実践が地域の文化のどのような側面から生まれ出て、地域の文化にどのような影響を与えていくのか、地域の在来の文化（例えば永楽館の存在や出石・但馬の教育文化）と戦時下紙芝居文化の相互浸透と拮抗の関係の分析も本共同研究の大事なテーマです。出石の街はこうしたテーマを考える一つの興味深い地域でもあったのです。



写真2 「出石いのちと平和の会」のみなさんと



写真3 「福住地区コミュニティセンター」での調査風景



6. 川見家所蔵紙芝居の調査結果

川見家が所蔵する紙芝居は、「福住地区コミュニティセンター」の会議室をお借りして、調査を行いました。川見さんから事前に提供された目録56点と、私ども研究班が2014年度から調査を行ってきた戦時下紙芝居の全国調査結果および雑誌『教育紙芝居』『紙芝居』発売目録（その後『国策紙芝居からみる日本の戦争』勉誠出版に暫定版として掲載）とを照合した結果、①それまでの調査では未発掘であった作品が1点、②雑誌『教育紙芝居』『紙芝居』では刊行・発売が確認されるものの全国調査では所蔵機関を突き止めることができなかった作品が9点、③全国調査で所蔵館が判明したものの本センターでは所蔵していない作品が14点あることが判明し、川見さんの許可を得て、これら合計24点について12月16～17日の両日にわたって撮影作業を行いました。その他、本センターとの重複30点、戦後作品2点は対象外としました。ほとんどの作品は、入手時のまま専用の袋に入っており（タイトル等を縦書・墨書）、保存状態も良好なものでした。以下にその概要を示します。

①新規発掘作品である『少国民訓』は著者、出版者不明、全18枚、A4横版。表紙下部に「少国民新聞社制定」「文部省教務局指導」の右書貼紙（白色）、袋に「児童共同作品」（墨書）とある。刊行年は不明だが、8枚目裏面に「七月二十四日には校長先生から空の軍神加藤建夫少将の話を聞きました」とあることから、加藤建夫の戦死（1942年5月22日）、陸軍省から正式に「軍神加藤少将戦死」と国民に向けて発表（7月22日）、各新聞のトップ・ニュースとして報道（7月23日）されたことをうけて、どこかの地域の国民学校児童が手作りしたものと推定される。絵・脚本ともに明らかに子どもの

手によるもので完成度も当時の紙芝居作品として高いものではない。作品中に“少国民訓”が箇条的に示されているわけではなく、当時さまざまな媒体で語られていたであろう軍神・加藤の幼少期を回想しながら「海外雄飛のため南方語」「物を作り出す基礎となる科学する心」を学ぼうという少国民向けの訓話的作品である。『少国民訓』については、大阪毎日新聞社「少国民新聞」昭和17年9月6日号社友・村岡花子の署名記事「『少国民訓』とお母さんの心がまえ」のリードに“文部省教務局の指導のもとに半年余の苦心によって制定された少国民のための「戦陣訓」ともいふべき「少国民訓」をけふの色刷りで「紙芝居」を添へて（中略）その普及に努力してゐます”とある。また小冊子『少国民訓』文部省教務局指導——少国民新聞制定、東京日日新聞社、全26頁、1942.12の刊行（東京大学大学院教育学研究科・教育学部図書室所蔵）が確認されるが、これと本紙芝居作品との内容的・直接的関係はないと考えられる。紙芝居作品として『同名：ポケット型紙芝居』出版事項不明、18枚：6×8cmの所蔵（大阪府立中央図書館児童文学館）が確認されることから、この時期、同種作品の試みが各地であった可能性も推定される。



写真4 少国民訓

タイトル	脚本等	絵画	出版者	出版年月日	枚数
愛馬：写真紙芝居			日本教育画劇	1941.05.08	10
紙幣の壺	林家正楽	加太こうじ	画劇報国社	1943.02.15	12
チョビ助物語			大東亜文化画劇	1943.03.18	12
敵くだる日まで	和田義臣	西正世志	日本教育画劇	1943.08.05	20
南京陥落	松本一晴（原作・脚色）； 大村能章（編曲）	畠野圭右（配画）	大東亜文化画劇	1942.03.28	12
兄さんの出征	松本一晴（作詞）	畠野圭右（作画・演出）	大東亜文化画劇	1942.04.28	12
日本海大海戦	平林博	小谷野半二	日本教育画劇	1942.01.20	25
廟巷鎮の血煙	水谷しきを（脚色・作曲・ 指揮）	畠野圭右（配画）	大東亜文化画劇	1942.03.28	12
よい子のけんちゃん	すずきそのゑ（原作）	百合三郎	大東亜文化画劇	1943.06.25	8

②今回の調査により初めて「所蔵先」が判明したものは、前頁下記表の9点である。出版社はすべて「東京」、1941～43年前半までに刊行されたもので、主題は「軍馬」「銃後」「皇軍」ものと多様である。これらはすなわち、現時点までの全国調査では川見家だけが所蔵している作品ということになり、今回の調査で絵画・脚本ともに明らかになったことの意義は大きいといえる。

③全国調査で所蔵館が判明していたものの本センターに所蔵していない作品は、次の14点である。書誌事項は上記『国策紙芝居からみる日本の戦争』に掲載しているので、紙面の関係でタイトルのみを五十音順に示すこととする。これら(項目①～③)については、いずれかの機会に「一点ごと解題」の形で紹介させていただく必要があると考えている。

『愛機南へ飛ぶ』『浮世床』『大江山の鬼退治』『金物総動員：写真紙芝居』『玉碎・軍神部隊』『建国のわらべ』『孝行からず』『喋るな聞くな：防諜紙芝居』『蟬』『猪八戒』『続く人々』『泣いた赤鬼』『母こそ光』『膝栗毛 弥次さんと北八』

④撮影作業の対象外とした本センターとの重複作品30点、戦後作品2点は、下記の通りである。同じく紙面の関係でタイトルのみを五十音順に示すこととする。

重複：『雨の降る日』『安楽伝授所：日本教育紙芝居協会版』『家：文部省監修作品』『撃ちてしまむ：陸軍省報道部委嘱作品』『阿新丸：少年太平記』『軍神岩佐中佐』『軍神の母』『軍刀：安間愛二郎著「海軍秘話」より』『五人の庄屋(臣民の道シリーズ)』『銃後の力』『真珠湾余聞』『空の軍神加藤少将』『ソロモン海戦』『高田屋嘉兵衛』『高山彦九郎』『忠臣蔵. 前篇』『忠臣蔵. 後篇』『爪文字』『手』『敵国降伏(こうぶく)』『とべとべ高く』『虎造くづし：清水一家の三下奴』『中沢挺身隊：ガダルカナル島血戦記』『新田義貞』『二宮尊徳：壮年時代服部

家再興』『芭蕉』『花サカチヂイ：「ヨミカタ、二ノ二十一」ニヨル』『風流蜀山人』『本居宣長』『物語愛国百人一首』

戦後作品：『少年野口英世』『宝島』

※本稿は、1～5項：大串、6項：原田の分担執筆である。

【注】

- (1) 川見章夫さんご自身の優れた家族史発掘のお仕事として、川見章夫『520文字が語る【戦死】—台湾・深堀大尉測量隊事件(日清戦争後 台湾統治がはじまった時)』私家版、2017年がある。
- (2) 川見章夫さんからの聞き取り。2017.12.16、ご自宅にて研究班メンバー6人による。また後日「川見忠雄 履歴」の提供を受けた。
- (3) 川見章夫さんには出石焼窯跡を案内してもらうとともに、出石焼の小皿で食べる「出石皿そば」の名店をご紹介いただいた。
- (4) 兵庫県教育史編集委員会編『兵庫県教育史』兵庫県教育委員会、1963年。なお弘道学校については、とりあえず梅村佳代「近世後期～明治初期、但馬地域の教育の歴史的考察—出石藩の藩校から「学制」期の小学校創設までを対象として」『奈良教育大学紀要 人文・社会科学』第56巻第1号、2007.10を参照。
- (5) 児島義一「我が校に於ける郷土の観察の一考察」『兵庫教育』第624号、1941.11.15、前掲『兵庫県教育史』507頁。
- (6) 金山輝雄「兵庫通信」『教育紙芝居』第1巻第2号、1938.10.1。
- (7) 八木康敏「丹後ちりめん物語—うらにし」の風土と人間』三省堂新書、1970年。
- (8) 斎藤隆夫については草柳大蔵・松本健一らの仕事や新史料をふまえ、新たに本格的な伝記研究が始まると思う。とりあえず、斎藤隆夫『回顧七十年』中公文庫、1987年、斎藤隆夫/伊藤隆編『斎藤隆夫日記』上下、中央公論新社、2009年、粟屋憲太郎『昭和の歴史6 昭和の政党』小学館、1983年(現在、岩波現代文庫)。伊藤之雄「名望家秩序の改造と青年党運動—斎藤隆夫をめぐる但馬の人々」『日本史研究』第214号、1982.9、同『大正デモクラシーと政党政治』山川出版社、1987年など。戦争中の斎藤隆夫への手紙は一部、吉見義明ほか編「資料日本現代史 11 日中戦争期の国民動員②」大月書店、1984年に収録されている。
- (9) 木村元「東井義雄の戦中・戦後経験とベタゴジ—戦後教育実践に刻んだもの」三谷孝編『戦争と民衆—戦争経験を問い直す』旬報社、2008年。なお「ふるさと紙芝居の会」の方(元・国語教師)からは作文教育に関して兵教組城崎支部小学校部会文化部編『作文風土記 子供の地図』第3集、1954.11などの貴重な文献の提供をうけた。
- (10) 出石町史編集委員会編『出石町史』出石町、1991年、644頁。なお兵庫県の農村地域においてさかんな民衆娯楽については兵庫県学務部社会教育課編『兵庫県社会教育概要』兵庫県、1934年参照。

以上